

朝日 俳壇

第39回 朝日歌壇

2022年の入選歌から選者4人が1
選びました。賞状と記念品が受賞者
れます。朝日俳壇賞は来週掲載しま

●高野 公彦 選

☆暗き部屋に老女が独り寒い、と震えておりぬ

これが戦争 (松戸市) 遠山 絢子

湯たんばにお湯入れ思うウクライナの冬寒かる
うな辛かるうな (福島市) 美原 凍子

「人は皆必ず死ぬ」とプーチンが戦死の兵の母
に言いたり (観音寺市) 篠原 俊剛

ぎりぎりのゴールラインで蹴り返す三笠薫の
「ブラボー」な足 (安中市) 鬼形 輝雄

アディショナルタイムは七分 ついに家事あき
らめて見るスペイン戦を (彦根市) 今村 佳子

PKが明暗分ける残酷さそれまでの苦闘無きか
の如く (三鷹市) 山縣 駿介

ふと時が入れ子細工になっていく教え子の子を
教える教室 (可見市) 前川 泰信

新しい目標ができたいつの日か自分で愛車のタ
イヤ交換 (富山市) 松田 梨子

庭隅のバードテーブルに雀群れわが家のテーブ
ルは吾一人 (北海道) 小松 祥一

ハロウィンが終わってすぐにツリー立つどこへ
行ったか日本の秋 (土岐市) 小林 智子

評 一首目と二首目、ウクライナの人々の窮
状を思う歌。三首目、冷酷無比なロシアの
元首の言葉。四首目、六首目、サッカーW杯は日
本中を大いに沸かせた。強いドイツ、スペインに
勝ち、その後惜しくもPK戦で敗れたが。

馬場 選

手始めに線量測る畑仕事十二年目の福島
の春 (須賀川市) 近内志津子



野菜が美味しく住み
よい福島。震災で一
変。今も苦しんでいる
現実を知って欲しい。
原発に頼らない暮らしを願っています。

評 春の畑仕事に放射線量の測定が
いる福島の現実。今春十三年目を迎える。

佐佐木 選

戦争は祈りだけでは止まらない 陽に灼
かれつつデモに加わる (東京都) 十亀 弘史



ウクライナの戦火は
消えず、日本は一気に
大軍拡へ。しかし、変
えることができます。
戦争反対の行動を、もっと、です。

評 戦争が近づく心配がする今。祈
りと行動の差異に光をあてて鋭い。

高野 選

青森は上空通過のミサイルもウクライナ
では通過などせず (五所川原市) 戸沢大二郎



通過しただけでもあ
の恐怖。毎日着弾し、
犠牲者が出る中で生き
る人々の心中を思うと
心が痛みます。平和を祈っています。

評 上空通過も迷惑だが、通過せず
着地するのは言語道断。戦争否定の歌。

永田 選

虐待という言葉まだ知らぬ子は「ママ、
めんね」と餓死をしました (岡山市) 牧野 恵子



虐待された子が餓
て死ぬ寸前に、なんで
謝る必要があるのか。
あまりに悲惨なので
を詠まずにいられませんでした。

評 誰もが言葉失う悲惨な現実。
だからこそ詠っておかねばならない。

●永田 和宏 選

幾人が拘束される罰さるるかの国なれば今朝の
歌壇は (松山市) 宇和上 正

山茶花の日和に霧のあるごとく花弁を揺らしは
らはらと散る (山梨県) 笠井 彰

枇杷の花窓に盛りて方丈は掛け軸読めず陰翳ま
た佳し (朝霞市) 青垣 進

雪ふぶく宗谷岬の怒濤聞くかくも近きか隣国口
シア (仙台市) 沼沢 修

カタールの陽光溢れる会場とローソクの灯のキ
ーウのシェルター (三鷹市) 山縣 駿介

暗き部屋に老女が独り寒い、と震えておりぬ
これが戦争 (松戸市) 遠山 絢子

日本が盾で米国が矛という役割分担初めて知り
ぬ (江別市) 成田 強

のら猫は我が家の子となり愛されて六つの季節
を過ごして逝った (鶴岡市) 宮野 ゆき

事故検分終へて十日の農道にチョーク痕消えぬ
村のしづもり (西条市) 村上 敏之

サンタさんは鍵屋じゃないと入れない姉の疑問
にうなずく弟 (福岡市) 藤掛 博子

評 宇和上さん、「かの国」では朝日歌壇な
ど格好の餌食になるだろう。でも心配無
用、まず選者が拘束される筈。二、三首目、谷崎
潤一郎『陰翳礼讃』風に。沼沢さん、現地に立つ
ことで実感される隣国という意識、ロシアの近き。

●馬場 あき子 選

百日を耐えれば春はまた来ると我を励ますウク
ライナの (五所川原市) 戸沢大二郎

カタールの陽光溢れる会場とローソクの灯のキ
ーウのシェルター (三鷹市) 山縣 駿介

「人は死ぬ」と病死事故死もあるけれど戦死は
あんなのせいだプーチン (茨城県) 樫村 好則

心病む子の精いっばいの「おはよう」に光溢れ
ぬ露おく窓辺 (京都市) 川端 緋

歳古れば膺の乳房の重たくてリボンを掛けて断
捨離をする (高崎市) 鳥山みなみ

楽しかったことはいっばいあったのになんでさ
よならばかり歌になる (筑後市) 近藤 史紀

わが病状進まずに春には出会はんとチューリッ
プ八つに土をかける (始良市) 北村あゆち

言いたげに吾に手を触れじつと見る話せたら
いね膝の老猫 (小金井市) 佐藤ひろ子

水辺にて鴨と語らう安らぎは老いと病の贈り物
なり (中津市) 瀬口 美子

おしどり夫婦だったか今は亡き父の遺影の埃拭
いている母 (西東京市) 濱田 朝子

評 第一首は根気よく粘り強いウクライナ人
の精神を感じさせる言葉に励まされる思
い。第四句は映像でみて励まされたのか。第二首
のW杯会場のカタールの陽光と賑わいに対照され
たキーウの現実。これをどう見る、と言いたげだ。

●佐佐木 幸綱 選

廃線と決まり賑わう留萌駅前の中汽車が無く
なる (留萌市) 江島 幸枝

霧深い三次の街で友と逢う浮かび出る影変わら
ない声 (出雲市) 塩田 直也

ゴールならず選手のひとり地に伏してその悔し
さを世界に見せたり (伊賀市) 秋田 彦子

婆様が冬の夜鍋に細き針へ糸通すときシユ
トに出合ふ (坂戸市) 納谷香代子

雪を呼び雪にかがやく青森の善知鳥神社の冬紅
葉佳し (相馬市) 根岸 浩一

縄飛びもお手玉も遊びにはみな歌がついてゐた
昭和の遊び (川崎市) 宇藤 順子

またひとつ高層ビルが建ち上がり街はますます
無口になりぬ (川崎市) 新井美千代

境内に残る大きな切り株にぐくろうさまと風通
り過ぐ (岐阜市) 後藤 進

AIの自動音声水分を持たざる声がニュースを
伝ふ (大網白里市) 川島 薫子

冬タイヤ交換済みかをチェックする山の学校の
教頭忙し (酒田市) 朝岡 剛

評 第一首、北海道の留萌線の段階的廃止が
決定した。「諦めの中」に地元の人たちの思
いが読める。第二首、霧の深さと濃さを表現して
印象的。第三、四首、W杯サッカー、日本頑張れの
歌が多かった中で、映像そのものに取材した一首。

☆印は共選作。掲載作は本社電子メディアに収録します。●投稿は無地のはがき1枚に1作
品。未発表の自作に限ります。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記してください。あて先は
〒104-8661 晴海郵便局私書箱200 朝日歌壇(俳壇)編集部